

冬の薔薇

「去リシ日ノ薔薇ハ名バカリニテ、虚シキ名ノミ残レリ」

ウンベルト・エーコ『薔薇の名前』は、この老修道士アドソの諦念に満ちた言葉で終わっている。彼のモデルが十世紀に『アンチキリストの出現と時代』を記した終末論者アドソ・モンティエル・アン・デルであるとするなら、感傷的なエンディングにもうなずける。若い修練士として遭遇したミステリアスな事件から数年を経て、今は廃墟となったかつての修道院を訪れたアドソは、図書館跡に焼け残ったいくつかの写本の断片を見つける。しかしそれらはいかにうまく再構成されてもただの「記号のつぎはぎ細工」以上のものではない。図書館も修道院も、そして敬愛した師も、彼が戒めを破って愛した「少女」も、彼女の村もはや存在しない。それらはすべて虚シキ名となつて残ったにすぎない。「薔薇」とは彼が名も知らず愛した少女に与えた記号であつた。しかし「nomina nuda tenemus」と語るアドソは薔薇の名前が虚しくなつたと嘆いているだけなのであろうか。筆者にはそれが別の意味のように思えてならない。

彼の師パスカヴィルのウィリアムのモデルは中世の論理学者オッ

てはならない。神が望めば、一角獣だつて存在するかもしれないではないか。がっかりするな。それはともかくも書物の中には存在するのだから。たとえ現実ではなくとも、可能な存在としてわれわれには知らされているのだから」(第四日終課後)。

確かにウィリアムとオッカムは似ている。「唯名論」や「剃刀」という言葉から、オッカムは一般には無駄をゆるさない禁欲主義者のように見られがちであるが、普遍を否定し個物を認める彼の理論は実際は認識に大幅な自由裁量を認めたのである。そしてウィリアム同様、オッカムも名を否定してはいない。彼が言わんとしたのは、名辞に抽象と具象があるのではなく、認識の際に名辞は斉一的に働くということである。「抽象名辞が示す白さを認識するとは、普遍的なものを認識することではなく、具象名辞が示す白いものを認識することである。それゆえ、具象的な何かを認識するとは個体の認識であり、抽象的な何かを認識するとは普遍的認識であるというのは、愚かで馬鹿げている。[...] それゆえ、あるものを具体的に名辞で示された通りに認識し、同じものを抽象的な名辞で示された通りに認識するなど考えられない。あるものは「抽象と具象の」両方の名で示されて現れるのである」(『命題集註解』第一巻3、6)。名前は普遍ではないが、しかしそれを個体に貼りつけたラベルとだけしか理解しなければ、個体が消えれば名前も消える。アペラールもこれを駁して、「薔薇が存在しなければ、『薔薇』は何の名であるのか」と問うた。薔薇の名前はそれでも確かに存在するで

香田 芳樹

カムのウィリアムだとされる。事実、作中には普遍論争を思わせる機知に富んだ師弟の会話が随所に挿入されている。ウィリアムは徹底した論理学者である。「私は記号の真実を疑ったことはない。アドソよ、記号とは人間がこの世と折り合いをつけるために手にしている唯一のものだからだ。私が理解できなかったのは記号と記号の間の相互関係だ」(第七日夜)。彼は記号(殺人現場)をたどること、真犯人に行き着くことができると思つて行動するが、同時に記号の分析がそのまま事件の解明につながると思えていない。なぜなら記号とは複合的に結びつけば、まったく予測不可能な意味をつくりはじめるからだ。記号間の規則性を解明できると考えることは、ウィリアムにはこの上ない思い上がりのように思えた。なぜならそうすることは、人知のおよばない神の全能に制限を加え、神を人間の虜囚にしてしまうからである。たとえば書物に書かれた一角獣はそのままで一角獣の実在を保証するものではない。それでは実在しない一角獣を記した写本は嘘をいっているのかというアドソの問いに師は次のように答える。「われわれは神の全能に制限を加え

はないか、と。名前とは薔薇の存在を表すただのシグナルではなく、人がそれを美しいと感じ名づけたという感性の実在なのである。nomina にせよ species intelligibiles にせよ認識媒体なくして、直観的認識(notitia intuitiva)だけで驚くかみにした薔薇に美しさなどあるまい。そして、オッカムのいう「白」を「薔薇」に読み換えてみれば、アドソの言葉にも積極的な意味が現れる。即ち nomina nuda とは「唯の名」ではなく、剃刀に肉をそがれた「裸の名」、これをわれわれは手にしている(tenemus)、知性の残した薔薇の名前こそ唯一の薔薇の実在である、と。

唯名論者たちが名前を否定しなかったように、実在論者たちもイデアをただ称揚したのではない。オッカムと同時代に生き、同時期に異端の嫌疑を受けてアヴィニヨンの教皇庁に召喚されたマイスター・エックハルトも、認識論においてはプラトン主義者であつたが、同時に個物の尊厳を認めていた。彼を神秘主義者であるとし、「名づけないもの」を体験によって直接捉えようとした思想家と理解するのは、誤りである。確かに彼のいう「無名性」(Namenlosigkeit)は、神からあらゆる属性を取りはらい「裸の神」を掴むべきであるという彼の根本思想に通じている。しかしそれはオッカム同様、直観的認識で神を観ることに甘んじよということではない。神はやはり言葉・知性であり、ロゴスなのである。「神について言いうる最も本来的なことは、『言』(このこと)であり『真理』ということである」(説教第九番 創文社版『ドイツ語説教集』四一

頁)。それが言葉であり真理である限り、人間に対してある何ものである。では、それは人間の言葉やイメージとどのような関係にあるのであろうか。エックハルトは言葉に三つの在り方を認めた。「生み出された言葉がある。すなわち天使と人間とすべての被造物がそれである。別種の言葉がある。すなわち思惟され表出された言葉で、私が何かを思い浮かべるのは、それによってである。さらにもう一種別の、生み出されもせず思惟されもしない《言》がある。それは決して外に出ることはなく、その言葉を言うものの内に永遠に留まっている」(同四三頁)。生み出された言葉とは音声言語であり、思惟された言葉とはイメージである。それらは人間的で、永遠の《言》に比べれば不完全であるが、かといってそれから完全に断絶しているわけではない。「生み出された」といわれるように三つの状態には父と子と聖霊の三位一体の関係がある。この絆の中で人の言葉は神的な《言》のよう(qualis)何か、即ち「添え語」であることを許されている。しかしそれはただの付属物としてではない。添え語は《言》に寄り添うがゆえに神に等しく近く、神のよう、なものである。

名前には神的能力が宿っている。それは事象や空間を超える力である。エックハルトは言う。「魂にはさらに一つの力、それによって魂が思惟する力がある。この力は、現に存在しない事物を、自分の中に思い浮かべることができる。私はそれらの事物を眼で見ているかのように、いや、それ以上によく認識することができるのである」

＜ドイツ神秘主義叢書 2＞

マイスター・エックハルト
上田閑照訳／香田芳樹訳註

ドイツ語説教集

A 5 判・三六〇頁・五八〇〇円

「何故なしに生きる生の達者」エックハルトの説教は、ドイツ神秘主義の中でも霊性の頂点が迸り出て、キリスト教思想家の著作全体を通して最も透徹した思索を結晶したものといえる。彼は聖句に含まれた真理を徹底的に探索し、過去の教父の所論を吟味しながら、聖書自身すら表面的には語っていない事柄まで語り尽そうと試みた。二十一篇の説教の決定訳に加えて、詳細な訳註と精神史的系譜を辿る丁寧な解説を収録。

〔内容〕二十一篇の説教(神の御心に従うこと／脱却して自由な魂／魂のなかの或る一つの力／何故なしに生きること／神の働き／知性と意志／永遠の現在／純粹な一／真の祈り／愛について／神のもとに立ち返ること／魂の高貴な力／神との合一／魂の三つの貧しさ／神を見ること／無である神を捉えること／神と魂の同性性／神を認識する能力／魂における神の子の誕生／神を放下すること／観照の生と活動的生 訳註 解説 (エックハルトが出会った人々／エックハルトの銀河系／世界的世界への連峰) 後記 文献目録 索引

る。すなわち、私は冬でもバラの花を思惟しつつ思い描くことができる。この力をもって魂は非存在の中で働き、この点において、非存在の中で働く神に従っている」(同四〇頁)。冬の薔薇は実在しない幻であるが、それは存在しないことによって時空を超えた神的な薔薇でもある。それが神的存在なのは、知性が神を裸にしているのと同じように、質料を剥ぎとられているからである。「知性は神から善の毛皮を剥いで、神が善や存在や一切の名前の衣を脱いだところで、裸の神(Got bloß)をつかむ」(同)。知性の中で咲く純粹な薔薇、裸の薔薇は現実の薔薇以上によく、認識の対象となる。虚と実の境界をすり抜ける冬の薔薇こそ、純粹な矛盾でありつつ、真に実在するものといえるのではないだろうか。エーコは一四世紀のドイツ(もちろん当時はドイツという統一国家は存在せず神聖ローマ帝国であったが)を神秘家たちの国のように描いている。言語の無力さを嘆くウィリアムに、あるドイツの神秘思想家の言葉として、「登り終えれば梯子は外さなければならぬ」(Er muoz geliche-same die leiter abewerfen, so er an ir afgestigen)を引かせたり、ドイツ語圏出身の修道士たちを頑ななまでに敬虔に描くことからそれは明らかだ。そこでは「ドイツ的」とは、オックスフォードやパリで推し進められていた科学主義に真っ向から対立する「非合理的」なものを意味するのである。もちろんオーストリアのメルク出身のアドソとて例外ではない。憂愁の中にたえず老修道士は物語を次のように結ぶ。「まもなく私は始源と再び一つになるだろう。それはわが教団の僧院長たちが語ってくれたような栄光の神であるとも思わないし、フランシスコ会の兄弟たちが信じていたような歓喜の神であるとも、慈愛の神であるとも思わない。神とは《今》も《ここ》も触れることのできない純粹な無である。私は、敬虔な魂が至福のうちに朽ちていく、最も遠く最も漠とした計りがたい荒野へと進んでいくだろう。私は神の闇へと、沈黙へと、名状しがたい合一へと沈んでいくだろう。そして沈みながら、すべての差異同一が失われ、無底の中で私の精神もまた失われて、神も自己も差異同一も何もかもがわからなくなるだろう。すべての差異が解消され、私は一なる根底へと、静謐な砂漠へと、誰もいない最内奥へと入っていくだろう。私は寂寥とした神性に身を浸し、そこには作品も姿もない……」《純粹な無》《無底》《荒野》《合一》——アドソのこのメランコリックな結語はエックハルトの神秘教説のエッセンスである。老フランシスコ会士が人生の幕引きの瞬間に、教団の教えに背を向けてエックハルトに帰依するこのラストシーンに作者はどんな思いを込めたのだろうか。それは老いの諦念なのか、それとも神秘的合一を予感した厳肅な覚悟なのか。「去リシ日ノ薔薇ハ名バカリニテ、虚シキ名ノミ残レリ」。寂寥とした神性に身を浸したとき、「裸の薔薇」ははたして虚しいのであろうか。この句の本当の意味は、この問いに答えてはじめて明らかになるのであろう。

(こうだ・よしき／大東文化大学外国語学部助教授／ドイツ文学)